sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～18教区本宮寺（佐藤善廣副会長御自坊）の佛様～

「弁道会」に参加して

七月六日、秋田県宗務所・禅センターにおいて令和四年度弁道会「**精進料理考～道元禅師の食作法に見る戒律の影響～**」が開催されました。

講師として「禅の友」でも精進料理のレシピを公開している**吉村昇洋師**を迎え、精進料理とはどのようなものであるかを、仏教における戒律や歴史から紐解いて講義して頂きました。

はじめに、仏教で口にしてはいけない肉・魚介類・卵・葷酒について、部派仏教と大乗仏教それぞれの戒を比較して、禁止された理由を説明されました。その中でも肉食に関して師が指摘された、不殺生戒にあたるため禁止されていると思い込んでいたのが誤りであるということが印象的でした。初期仏教では肉食もされていたのが、インドの階級制度からくる浄・不浄感や、後のヒンドゥー文化の影響等の社会状況の変化により、**肉食は贅沢で修行者がするものではない**ということが仏教に影響を与えたという歴史を学びました。つまり、部派仏教・大乗仏教どちらも**社会状況の変化により肉食を禁止するようになっていった**ということがあり、大乗仏教の不殺生戒がはじまりではないということでした。

また、初期仏教・部派仏教において制定された、具足戒による食事の規定や教戒律儀と、我々曹洞宗の赴粥飯法の比較を解説していただくと、まさに我々が修行中に行っていた僧堂飯台と重なっていることがわかりました。これは道元禅師が昔から伝わってきた仏教をよく学んで引用されたことで、赴粥飯法として現代まで残していただいたありがたいことだと感じました。

そして食事の際に唱える五観の偈に関しても、禅宗だけではなく**ほとんどの宗派で唱えられている**こともはじめて知りました。全く同じ文言ではないものの、意味はほぼ同じであり、仏道修行の為の食事であることが、やはり各宗に共通しているのだと確認できました。

最後に精進料理とは頂く側だけではなく、作る側にとっても大事な仏道修行であると伝えられています。禅苑清規や典座教訓には典座の心構えが書かれており、喜心・老心・大心の心で料理を作り修行僧を供養するということが大事なことであります。

今まで精進料理ときいても漠然としたイメージしか湧きませんでしたが、この講義を聞いてその歴史や頂く側の心構え・作法もとても重要なものであるということがわかりました。今後も自分から学び、少しでも実践できるようにしたいと感じました。

（佐々木光惇）

県南四教区 禅の集い

コロナ蔓延の影響で度々開催が延期されておりました禅の集いが、日程を改めて七月三十日に開催されました。日帰りでの開催となり、参加される子供たちにどんな体験をさせてあげられるか、どんな思い出を残してあげられるかを考えながらの準備期間になりました。いざ当日、私が参加していたころを思い出し、懐かしさを感じながら、参加者への対応となりました。子供たちにとっては、初めての経験ばかりで慣れないことも多かったようですが、非常に熱心に取り組んでいたことが印象に残っています。座禅や読経の機会は日程の都合上少なくなってしまいましたが、その中でも熱心に取り組んでいる姿に感動しました。レクリエーションの時間になると子供らしい姿を見て微笑ましく思ったこともありました。方言での昔話を聞く場面では、方言というものに触れてその大事さに気づいてもらえるきっかけになればいいな、と思いました。参加人数も少なく、日程も日帰りでの開催にはな

りましたが、「楽しかった！」と帰っていく姿を見て、達成感と同時に、今後どういったことができるのか考えながらの禅の集いとなりました。

（十五教区 西蔵寺内 柿崎隆昌）

「境内祭り 萬燈会」

私が住職を務める龍源寺では、毎年五月後半に「萬燈会」を催している。先代住職が始めたものであるが、当初は名前の通りお祭りとして開催されたものであった。観音菩薩をお奉りし、屋台を出して観音講の講員や一般の方にお参り頂いていたのが、境内祭りの由来である。

しかし、いつからか講員の中から、「法要として行いたい」という声が上がり、それが提灯をつるし、蝋燭を点しての萬燈会へと変わっていった。一人一人の名前が入った提灯を境内につるし、堂内の電気を全て落とし、あらかじめ準備された経木塔婆を開眼し、法華塔に供えて祈りを捧げるものである。

私が修行を終えて帰って来た頃にはすっかり定着していたが、私にとってみれば全く初めて見る儀式だった。私が学生の頃に始まったものであったし、安居していた頃は永平寺でも行われていなかった。だが、元から儀式や作法への取り組みが好きな自分として、これほどやりがいのある法要は無かった。

お寺での儀式は、亡くなった方々への供養だけでなく、同じ時代・同じ世界に生きている者の為に祈るものでもあるべきだと考え始めたのも、この萬燈会があったからだ。

調べてみると萬燈会の歴史は非常に古く、宗派を問わずに行われている儀式の一つでもある。そして何より、萬燈会とは何か、どういう法要なのかを調べているうちに気がついたことは、萬燈を点して祈りを捧げる、という行いが主なのであって、それ以外の決まった形式は無い、ということだ。奈良の東大寺で毎年お盆に執り行われているものは、無論私たちのとは全く違う内容であるし、現在曹洞宗が萬燈会として開示しているものと、昭和中期にやはり宗門が発行した萬燈会とでも、その差定は大きく異なっている。

そしてこう考えるようになった。龍源寺の萬燈会そのものが祭りから法要へ変化したように、儀式法要そのものも変え続けていくべきだ、と。

コロナ禍になり、昨年はネット配信のみで開催。今年はお参りの方をお迎えした上で、さらに専門業者に来て頂いての配信を行った。それだけでなく、今までは先祖や各々の思う方への供養としてのみ行われていたが、昨年からコロナ退散や世界平和、家族の健康や安全など、一人一人の願いや思いを祈る法要としての側面を組み入れた。

言葉にすることで、またそれが自分自身へ還ってくる。

還ってきた言葉、祈りがまた自分自身を変えていく。

儀式法要を行うに当たって、私が大切だと思っていることだ。

それを体現する場を生んでくれた先代の思いや祈りを受け継ぎつつも、自らの信仰を育てるようにより美しく、より強く、より新しく変えていく法要。それが私にとっての萬燈会である。

（土屋泰順）

八月十九日 大館市十二所地区での豪雨災害復興ボランティア

今回ボランティアに入ったお宅は地域で一件だけの被災でした。同じ市内に住む身として「〇〇地域　床上浸水一軒」という情報だけは知っていましたが、状況を知らず現場に入って被害の大きさに驚きました。民家脇を流れる川の増水が原因ですが、大きな要因は川にかかる橋に流木が複数引っかかり、川の水が左右にも大きく溢れたことにより、逆流する形で被災民家、小屋、車庫へ流入したというお話でした。

午前・午後総勢十五名で作業を進め、水を被った家具の搬出と、流入した泥を袋につめて屋外へ。床板がかなり傷んでおり、踏み抜きしそうな場所にはコンパネを敷きながら作業を進めた。水に浸かって動かせなくなったままの軽トラ、軽自動車を牽引し動かしてからは民家、小屋など並行して作業が進んだものの、まだ数日かかると感じました。

今回は自治会長からの報告で、迅速に状況の確認とボランティアの必要性を社協でも認識して動けたということでした。社協から情報を頂きながら今後の活動も考えていきたいと思いますし、県内他地域への活動へも協力していきたいと思います。

（副会長　佐藤善廣）

曹青秋田／第92号
発行／秋田県曹洞宗青年会
事務局／北秋田市鎌沢字家ノ南45　正法院内　発行責任者／栗谷 大三　編集責任者／佐々木耕志
秋曹青ホームページ　http://www.sousei-akita.net/